

遣唐使の停廃と「国風文化」

—「国風文化」の授業における留意点—

早川明夫

(文教大学附属教育研究所)

The Stop of Kentoushi and Kokufuu Culture : The Attention of Kokufuu Culture in Teaching

HAYAKAWA AKIO

(Institute of Education, Bunkyo University)

要旨

小中高の歴史教科書・教師用指導書・学習参考書などの大半は、「国風文化」の発生・発達を遣唐使の停廃とリンクさせて叙述している。これはこんにちの歴史学界の水準から大きく乖離している。そこで、教科書等の分析とあわせて、遣唐使と「国風文化」に関する先学の研究成果を踏まえ、「国風文化」の授業における留意点を示したい。

1. はじめに

毎年、首都圏を中心とした国立・私立中学校の社会科の入試問題を分析しているが、例年歴史学界の定説が反映されていない問題が散見される。つまり、こんにちの歴史研究の水準に照合してみても、明らかに否定されている内容が、入試問題で扱われているのである。

2～3例をあげれば、参勤交代の目的は大名の経済力と軍事力を削減して、江戸幕府に反抗できないようにするためであるとした¹⁾、宇治の平等院鳳凰堂を寝殿造の代表的な例として出題したりしている²⁾。また、伊藤博文が韓国独立運動家の安重根に射殺されたので日本は韓国を併合した³⁾、といったような内容による問題でいずれ誤った出題である。

本稿のテーマである「遣唐使の停廃と国風文化」に関連していえば、遣唐使が停止されたため、唐の文物が日本に輸入されなくなり、

その結果、唐の影響の希薄な日本風の文化(国風文化)が発生・発達した、という認識による出題である。2000年から2006年までの過去7年間に首都圏の国立・私立中学校だけでも、実に70校、年平均10校の学校で上記の観点に立脚した問題が出されている⁴⁾。

これは、授業においても、かつての学説・通説がまかり通っている、ということになる。

入試問題といえども、教科書同様、歴史学界の研究成果を拠り所とした学識と、教育的配慮に基づいて作成されるべきものである。

とはいえ、学問的な成果を小・中・高の歴史教科書に叙述するまでには、かなりの年数が必要とされる。本多公栄氏は20年位かかると見ている⁵⁾。また「教科書の編著者を含め、歴史教育にたずさわる者が心しなければならぬことは、学問的成果の摂取に対しあまりに性急であってはならない」という安田元久氏

II. 自由研究

の指摘も首肯できる⁶⁾。

本稿は、歴史学と歴史教育の関係やあり方を考察する際にも示唆に富むものであるが、ここでは紙幅の関係で割愛したい。

2. 遣唐使停廃と国風文化との関連性の有無

研究者のあいだでは、これまで遣唐使の停廃⁷⁾と国風文化の形成との関係をどのように捉えてきたのかを主として日本史辞典などによって概観してみたい。

まず「国風文化」という名称は、主に国文学の世界において、1930年代から撰閲時代の貴族文化を指して使用されるようになったとされている⁸⁾。それも「平安時代中期の文化を積極的に説明するためでなく、平安時代前期の唐風文化の隆盛を『国風暗黒』の文化として否定的に説明するために用いられた用語」であったという⁹⁾。

この「国風文化」という用語が、歴史学界で用いられるようになるのは戦後のことである。具体的には川崎庸之氏の「撰閲政治と国風文化」（『日本歴史講座第2巻原始・古代編』、河出書房 1951年）が早い例ではないか。そして「国風文化」が中学校用の歴史教科書に登場するのが、1955年発行の学校図書と日本書院の2社で、他社は「日本ふう（風）の文化」（三省堂、日本書籍、開隆堂、修文館、秀英出版など）・「藤原文化」（愛育社、大阪書籍）などの表現で、遣唐使の停廃と結びつけた記述であった。「国風文化」が歴史用語として定着するのは、1970年代からである。

辞典類を見ると、1958年と1968年刊行の『日本歴史大辞典』（河出書房新社）には、「国風文化」が見られない。また、1962年出版の『日本文化史辞典』（朝倉書店）にも記載されていない。そして、1974年に発行された『日本国語大辞典』（小学館）には、次のように説明されている。

「…また遣唐使の中止によって大陸との接

触が減るなどして既に摂取した文物を消化する時間を得たこともあって、先の唐風文化に比べて外国文化の影響が目立たない独自の文化様式を創出した。」（p.33）

この説明は、国風文化成立の要因のひとつに遣唐使の中止をあげている。

『国史大辞典第5巻』（吉川弘文館 1984年）は、川崎庸之氏が執筆しているが、遣唐使の中止には言及されていない。また、1997年発行の『日本史広辞典』（山川出版社）も同様である。

1990年刊行の『新編日本史辞典』（東京創元社）、1994年出版『平安時代史事典本編上』（角川書店）、1997年出版の『岩波日本史辞典』（岩波書店）、2000年刊行『日本歴史大事典2』（小学館）、2002年出版の『日本文化史ハンドブック』（東京堂）などは、いずれもみな国風文化の発生・発達と遣唐使の停廃とを直結した説明を古い「学説」として否定している。もっとも、1995年刊行の『日本史用語大事典』（新人物往来社）は「唐の衰え、遣唐使廃止によって日本独自の文化が育った」と従来の学説による説明をされている。

以上全体的には1970年代に用語として扱われ、1980年代以降はその内容が一部を除いて大きく変わった。つまり国風文化の発生・発達の要因や契機を遣唐使停廃に求めてはいない。米田雄介氏が1984年の論文で¹⁰⁾「いわゆる国風文化の形成を遣唐使の派遣中止に求める考えは、現在では否定されているといつてよいであろう」と述べているのは、妥当な見方である。しかし、こうした見解がはたしてどの程度、歴史教科書に、そして歴史教育に反映しているのか、前述の中学入試の現状を考えると、その懸念は払拭できない。そこで、次に小・中・高の歴史教科書には、国風文化がどのように叙述されているかを見ることにする。

3. 小・中・高の歴史教科書の分析

(1) 小学校の社会科教科書（6年上）分析

次の表1は、『小学校社会科・6年上』の「国風文化」についての記述一覧である。5社5冊すべてが、「国風文化」という歴史用語を用いていない。そして、「日本風の文化」発生を遣唐使の中止とリンクさせて記述しているのが、光村図書版である。しかし、各社の教師用指導書（以後指導書とする）を調べてみると、東京書籍版を除いて国風文化発生と遣唐使停廃を関連付けて説明している。つまり、小学校の教科書においては、東京書籍以外は、教科書の本文ないしは指導書において、両者を直結させた説明がなされている。このことにより、国風文化の発生要因を遣唐使の停廃に求める理解が、いかに根強いかが見てとれる。

(2) 中学校の社会科教科書（歴史的分野）

次頁の分析の表2は、現在発行されている『中学校社会科 歴史的分野』8社8冊の「国風文化」に関する記述一覧である。この表より、国風文化については、3類型（A～C）に分けることができる。Aは国風文化が

発生した時期と遣唐使が停廃された時期とを同一視している見方。教科書・指導書ともにこのタイプが最も多く8分の5を占めている。Bタイプは国風文化発生の時期を唐の滅亡や遣唐使中止後に求めるもので、8分の2。Cは遣唐使の中止にまったく触れずに国風文化を説明するタイプで、これは東京書籍1社のみである。東書は小学校の教科書においても同じスタンスに立っており、小・中の教科書は内容的に一貫しているといえる。もっとも、中学校用の指導書になると、東書も、国風文化が生まれた背景を遣唐使の中止に求めている。教科書と指導書の内容が一致していないのである。こうしたケースは多々ある。それは教科書と指導書の執筆者が異なることが多いからである。また、物理的な理由で教科書（白表紙）なしに指導書を書かなければならないこともあるからである。東書の逆のケースもある。清水書院版の場合、教科書本文で、唐の滅亡に触れながら国風文化を説明しているが、指導書では国風文化について「国風文化の形成を遣唐使派遣の中止によると短絡的にとらえることは避けたい。国風文化を強調することで中国の文化的影響を軽視すること

表1 『小学校社会科6年上』（2005年度版）国風文化に関する記述一覧

出版社	本文	指導案
大阪書籍	こうした貴族の生活から、奈良時代までとは違う日本風の文化が発達しました。(p.27)	遣唐使中止に関連して説明。
教育出版	貴族がはなやかな暮らしを送っていたこの時代には、大陸の影響からはなれた、日本独特の文化が生み出されました。(p.26)	遣唐使中止に関連して説明。
東京書籍	さらに、貴族の生活ぶりなどを描いた大和絵や、十二単とよばれる女性の服装など、日本風の文化がこのころ生まれました。(p.35)	遣唐使の中止にふれずに説明。
日本文教出版	中国からとり入れた文化を、日本の生活にあうようにしていききました。かなの発明は、それをよく示しています。(p.28)	遣唐使中止の記述あり。
光村図書	平安京に都が置かれて100年ほどたつと、唐の力も衰えてきたため、遣唐使も取りやめとなり、中国に強く影響された文化に代わって、日本風の文化が生まれてきました。(p.38)	遣唐使中止に関連して説明。

II. 自由研究

表2 『中学校社会科 歴史的分野』(2006年度版) 国風文化に関する記述一覧

出版社	本文	指導案
大阪書籍 ((A))	唐がおとろえ、遣唐使を停止した9世紀の終わりごろから、貴族のあいだでは、日本の風土や生活にかなった文化が生まれました。この時代の文化を国風文化といいます。(p.41)	国風文化発生の時期を遣唐使の停止ごろからと説明。
教育出版 ((A))	9世紀の終わりごろ、唐がおとろえると、朝廷は遣唐使をとりやめました。このころから、貴族は、中国の文化をもとにしながら、日本の風土や生活にそった文化を発達させました(国風文化)。(p.33)	国風文化の発達と遣唐使の中止を同一時期として説明。
清水書院 ((B))	10世紀のはじめに唐がほろびると、日本では、唐の文化から離れた独自の政治や文化のあゆみがはじまった。貴族のあいだでは、日本の自然や生活にあった文化が生まれた。これを国風文化という。(p.50)	国風文化の発生を唐の滅亡後として説明。
帝国書院 ((A))	唐のおとろえにより、894年、遣唐使の派遣が停止され、正式な国交がなくなりました。撰閣政治のころには、唐風の文化を日本人の生活や好みに合わせていこうとする考え方やくふうがなされ、独自の文化がみられるようになりました(国風文化)。	国風文化の発生と遣唐使の停止を同一時期として説明。
東京書籍 ((C))	平安時代半ばの貴族たちは、唐風の文化をふまえながらも、日本の風土や生活、日本人の感情に合った文化を生み出してきました。これを国風文化といい、撰閣政治のころに最も栄えました。(p.43)	国風文化発生の説明を遣唐使の中止に触れずに説明。
日本書籍 ((A))	平安貴族は、年中行事や各種の儀式を重んじる生活をおくり、中国の文学や歴史書を読んだり、みずから漢詩をつくったりして楽しんでた。しかし、遣唐使をやめた9世紀末ごろから、こうした唐風文化にかわって、日本の自然と生活にあった文化(国風文化)がおこった。(p.47)	国風文化の発生と遣唐使の中止を同一時期として説明。
日本文教出版 ((A))	9世紀末になると、遣唐使は送られなくなった。このころから、貴族は唐風の文化をこなして、日本の風土や生活にあった国風の文化を生み出し、文化のようすは大きく変わった。(p.31)	国風文化の発生と遣唐使の停止を同一時期として説明。
扶桑社 ((B))	9世紀に入ると唐がおとろえたため、894(寛平6)年、菅原道真の意見を取り入れ、朝廷は遣唐使を廃止した。その後、日本の風土や生活に合った、優美で繊細な貴族文化が発達した。これを国風文化とよぶ。(p.56)	遣唐使の廃止後に国風文化が発達したという説明。

がないようにしたい。」と¹¹⁾、指導上の助言をしている。

なお、扶桑社の旧版では「(遣唐使が廃止された)結果、貴族を中心に宮廷の洗練された文化がおこり、唐文化の影響を離れて日本化していった。これを国風文化とよぶ。」と

し¹²⁾、両者の因果関係を強調している。この部分、新版においては、若干修正されている。

中学歴史教科書は、全体的には、国風文化発生の時期と遣唐使中止をほぼ同一時期としているが、これでは両者を安易に結びつけて把握してしまうおそれがある。それに事実関

係としても、両者は同一時期とはいえない。

(3) 高等学校の歴史教科書『日本史B』の分析

『日本史B』（2004年版）の国風文化に関する記述一覧は、紙幅の関係で省略するが、手元にある6社6冊（東書・三省堂・清水書院・実教出版・桐原書店・山川出版）を見ると、3社は遣唐使の中止と関連付けずに国風文化を説明している。残り3社が遣唐使の停止と唐の滅亡あるいは日本と大陸との関係の変化と連動して説明している。とくに最も高いマーケットシェアをほこる山川出版の『詳説日本史』は、遣唐使の停止に言及してはいないが、「9世紀後半から10世紀にかけて日本と大陸との関係が大きく変化すると」¹³⁾ 国風文化が発生したかのような記述で、抽象的な表現のため、わかりにくくなっている。しかし、文面からすると、外交関係の大きな変化が契機となって国風文化が発生したようにとれる。

(4) 小・中・高の歴史教科書分析のまとめ

教科書の執筆にあたっては、小・中・高と対象が異なれば、それぞれに教育的な配慮が求められ、おのずからめいめい、内容や文章表現が異なってくるのは、やむをえないことである。また、ページ数の制限、学習指導要領の制約、教科書会社の注文など、教科書執筆者はなかなか思うようには書けないと思う。それらの点を考慮したとしても、こと国風文化に関してはこんにちの歴史学界の研究成果があまり反映されていないのではないか。遣唐使の停廃＝国風文化の発生というステレオタイプの理解が、旧態依然としてすくなくからぬ教科書や指導書で幅を利かしているのが実態である。

教科書や指導書に加えて、小・中・高生向けの学習参考書、教員採用試験用のテキストなどは、すべてといてよいほど、国風文化の起因を遣唐使派遣の中止に求めた説明となっている。一つだけ例をあげると、今年（2006

年）発行された中学生対象の学習参考書の『中学総合的研究 社会』（旺文社）を見ると、国風文化について「遣唐使の停止により、大陸からの新しい文化は来なくなったが、それまで吸収した唐の文化を日本の風土や生活にあった形にし、日本独自の文化を形成していくことになった。」（p.240）と叙述している。

そこで、こうした説明のどこに問題があるのか、ということ改めて確認しておく必要がある。主要な問題点は2つある。ひとつは、前半部分の遣唐使の派遣が停止されたことによって、本当に唐との交渉・ゆききがなくなってしまったのかどうか、ということ。もう一点は、国風文化の内容・中味が日本独自の文化といえるかどうかである。与えられた紙幅が残り少なくなってきたので、とくに前者に重点を置いて述べ、国風文化の授業の留意点とする。

4. 国風文化の授業の留意点

ここでいう授業とは、主として中・高生を対象にしたものである。

次頁の表3は、唐商船の日本来航（往・来）の一覧である。唐の商船が日本に最初に来着したのは、資料上819（弘仁10）年のことである（表を参照）¹⁴⁾。つまり、唐人張元済兄弟や在唐新羅商人王請らが交易を目的に日本に向けて出帆し、出羽国に漂着したのである。その後、894（寛平6）年に菅原道真の献策により遣唐使派遣が中止されるまで、75年間に33回（819年も含め）、唐船が来航している。実質的に最後の遣唐使となった838（承和5）年の「承和の遣唐使」から計算すれば56年間に31回となり、ざっと2年に1回の割合となる。遣唐使が約260年間に20回ほど計画され、そのうち15ないし16回実際に渡航したとされている¹⁵⁾。およそ16～17年に1回位の割合である。両者を比較すると、9世紀中頃からの唐商船の来航が頻度の高いものであることがわかる。したがって、日本に流入した唐の先

表3 唐商船の来航一覧(1)

西暦	和暦年月日	記事	出典
819	弘仁10年	・唐人張覚済、新羅人王請・李信忠ら出羽国に漂着。	入唐求法巡礼行記
834	承和元年3月16日	・大宰府に滞在中の唐人張繼明の入京を許す。	続後記
838	承和5年6月13日	(事実上最後の遣唐使が博多津を出帆) ・藤原岳守、唐商沈道古らの貨物中より、『元白詩筆』を得て奏上す。	入唐求法巡礼行記 文徳実録
841	承和8年秋	・恵萼、新羅人の帰国に便乗して唐に向かい楚州に到る。	入唐求法巡礼行記 文徳実録
842	承和9年春 5月5日	・僧恵萼とその弟子、唐人李隣徳の船で帰国。 ・僧恵運、入唐のため唐商李処人の船で博多津を出発。	入唐求法巡礼行記 入唐五家伝恵運、平安遺文、安祥寺伽藍縁起資財帳
843	承和10年12月9日	・入唐留学僧仁好・順晶ら、新羅人張公靖の船に乗って帰国。	続後記
844	承和11年4～5月	・僧恵萼とその弟子が入唐。	入唐求法巡礼行記 金沢文庫白氏文集奥書
847	承和14年4月 7月8日 9月18日	・入唐留学僧円修、帰国。 ・日本人神御井等、唐船で日本に向け明州を出帆。 ・僧恵運・仁好・恵萼ら唐商張友信ら47人とともに帰国。 ・入唐僧円仁・惟正ら、新羅・唐商の船に便乗して帰国。	山王院蔵書目録 入唐求法巡礼行記 続後記
849	嘉祥2年8月4日 閏12月24日	・大宰府より、唐商53人の乗る船が到着したとの報あり。 ・これより先に、唐商徐公祐が来日。(徐公祐、しばしば唐・日間を往来)	入唐求法巡礼行記 平安遺文 悉曇藏 続後記
852	仁寿2年閏8月	・唐商(新羅人とも)欽良暉、博多に来航。	唐人送別詩并尺牘
853	仁寿3年7月15日	・円珍一行8人、商人王超・欽良暉らの船に乗り唐に向かう。	円珍和尚伝、智証大師年譜 行歴抄 円珍和尚伝 乞台州公験状 智証大師年譜
856	斉衡3年秋	・唐商李英覚・陳太信ら、広州から出帆。	智証大師将来目録 平安遺文、乞台州公験状、行歴抄

進文物も相当増大したと思われる。

ところで、894年に遣唐使の派遣が中止され、唐との公式な交渉が跡絶えたわけであるが、このことをかつては「鎖国」のように捉える研究者がいた。遣唐使の中止はあくまでも日本と唐との正式な国交が終えたというこ

とで、民間ベースでの貿易はすでに述べたように活発に展開され、大量の唐物も流入していたと思われる。このため、あえて危険な航海を冒して、また、国家財政窮乏のおり、莫大な経費を負担してまで遣唐使を派遣する必要もなかったのである。

表3 唐商船の来航一覧(2)

西暦	和暦年月日	記 事	出 典
858	天安2年6月22日	・円珍ら、唐商李延孝の船に便乗して博多に到着。	円珍和尚伝、智証大師年譜、園城寺文書、日本高僧伝要文抄、寺門伝記補録など
862	貞観4年7月23日	・これより先、唐商李延孝ら43人、来着。	三代実録、唐人送別詩并尺牘、風藻錢言集
	7月	・真如法親王、宗叡・賢真・恵萼ら、唐商張友信の船で唐に向かう。	頭陀親王入唐略記、入唐五家伝
863	貞観5年4月	・賢真・恵萼・忠全ら、唐商張友信の船で明州より帰国。	頭陀親王入唐略記
864	貞観6年	・唐商詹景全、日本に来航。	平安遺文
865	貞観7年6月	・宗叡ら、福州より唐商李延孝ら63人が乗った船で帰国。	頭陀親王入唐略記 三代実録
866	貞観8年9月1日	・唐商張言ら41人、大宰府に来着。	三代実録
867	貞観9年	・唐商詹景全、来朝。	円珍和尚伝
874	貞観16年6月3日	・唐商崔岌ら36人、肥前国松浦郡に来着。	三代実録
876	貞観18年7月14日	・唐商楊清ら31人、筑前国荒津に来着。	三代実録
877	元慶元年閏2月17日	・延暦寺僧齊詮・玄昭ら4人、唐船に乗るが、齊詮以外心中不安となり下船。	三代実録、円珍和尚伝、明匠略伝玄昭律師
	7月25日	・唐商崔鐸ら63人、筑前国に来着。	三代実録
	12月21日	・入唐求法僧智聡(豊智)、唐人駱漠中とその従者を伴って帰国。	三代実録、円珍和尚伝、平安遺文
881	元慶5年	・唐商張蒙・李達、来日。	円珍和尚伝、智証大師年譜、平安遺文
883	元慶7年	・唐商栢志貞、大宰府に来着。	円珍和尚伝、智証大師年譜
885	仁和元年10月20日	・これより先、唐商、大宰府に到る。(大宰府来着の唐商との私交易を禁止)	三代実録
893	寛平5年7月21日	・唐商周汾ら60人、博多津に来着。	三代実録
894	寛平6年9月	(菅原道真の建言により遣唐使を停止)	入唐五家伝
896	寛平8年3月4日	・唐人梨懐、入京。	紀略
903	延喜3年11月20日	・唐人景球ら、羊1頭・白鷺5隻を献上。	紀略
907	延喜7年	・唐商、来日。(唐の滅亡)	紀略、扶桑略記 平安遺文

表(1)・(2)の「唐商船の来航一覧表」の作成にあたっては、森克己『日宋貿易の研究』(国立書院 1948年)、村井康彦編『年表日本史第二卷平安』(筑摩書房 1980年)、対外関係史総合年表編集委員会編『対外関係史総合年表』(吉川弘文館 1999年)、加藤友康・瀬野精一郎・鳥海靖・丸山雍成編『日本史総合年表』(吉川弘文館 2001年)などを参照にして作成。なお、唐商船の中には在唐新羅商人の船も含む。これは9世紀中葉以前(承和年間まで)、日本に来航した商人は、史料上、唐・新羅人が混在しているケースが多いことから、在唐の新羅商人ではないか、という石井正敏氏らの先学の指摘を踏まえてのことである。

II. 自由研究

唐の衰退にともなう中国商船の来朝増加は、たんに、中国文物の流入が増大したにとどまらず、これまで海外持出し禁止の品々（禁制品）も入手できるようになった。

唐滅亡後に建国された宋商船の来航は、宋建国から平安時代末までの約200年間で70回以上になるという¹⁰⁾。したがって、遣唐使の停廃以前よりも、以後の方が中国文物が多く流入しているといえる。この背景のひとつに唐物に対する貴族たちの相も変わらぬ憧憬があったのである。中国からの大量の物流入に触発されて、「国風文化」が発展したのである。そして、この文化を物質的に支えたのが、唐物であったといえよう。

森克己氏がその著書『遣唐使』の「はしがき」に次のようなことを述べている¹¹⁾。

「動物学者や植物学者は交配によってよく新種をつくり出す。それと同じように、文化の進歩発展は固有文化と外来異質文化との交流によってのみおこり得るものである。日本文化の発達も絶えざる外来文化の摂取同化の累積によって出来上がってきたものであることはいうを要しない。」

国風文化を考える場合、よく噛み締めたい。

5. まとめ

遣唐使が停止されて、中国の文物が入手できなくなった結果、中国の影響を受けない、日本の風土や生活にあった文化（国風文化）が形成された。国風文化に関するこうした理解は、あたかも定説のように流布している。しかし、歴史学界においては否定されていく久しい。人は物事をひとたび刷り込んでしまうとなかなかリセットできないようである。

国風文化の説明（授業）にあたっては、より実態に即して見るため、また、誤解を避けるため、遣唐使の停廃に触れないことを勧めたい。実際、国風文化の形成と遣唐使の停廃は、因果関係がないのであるから。

注 記

- 1) 参勤交代は大名が将軍に対して忠誠を示す服属儀礼で、参勤を契機に将軍と大名との間に主従関係が成立する。大名の経済力低下は参勤交代の結果である。
- 2) 平等院鳳凰堂は、中堂が入母屋造、楼閣が宝形造、翼楼が切妻造で東向きに建てられている。
- 3) 伊藤博文が暗殺されたのは、1909年10月26日。これより先、同年7月6日に政府は「韓国併合に関する件」を閣議決定し、同日天皇が裁可している。
- 4) 主に『中学入学試験問題集社会編』（みくに出版）の2000～2006年の分析による。
- 5) 本多公栄他3名「座談会歴史学と歴史教育のあいだ」（歴史学研究会編『歴史学と歴史教育のあいだ』三省堂 1993年）p.26
- 6) 安田元久「歴史教育と歴史学」（安田元久監修『歴史教育と歴史学』（山川出版社）p.10
- 7) 遣唐使の停止については、遣唐大使菅原道、遣唐副使紀長谷雄、遣唐録事阿刀春正が、停止後も太政官符や牒の署名にそれぞれの称号を用いていることから、「廃止」ではなく「停止」ないしは「停廃」である。
- 8) 阿部猛・西垣晴次編『日本文化史ハンドブック』（東京堂 2002年）p.17
- 9) 木村茂光『「国風文化」の時代』（青木書店 1997年）p.16
- 10) 米田雄介「貴族文化の展開」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史2 古代』東京大学出版会 1984年）p.211
- 11) 清水書院版の教師用指導書（旧版による）p.61
- 12) 『新しい歴史教科書』（扶桑社）p.74
- 13) 『詳説日本史』（山川出版社）p.64
- 14) 819年の唐船来航について、森克己氏は漂着船で来航船ではないとしている。つ

まり、貿易を目的としていたのではない、
という見方である。(森克己『遣唐使』
(至文堂) p.210~211

- 15) 遣唐使の派遣計画については、19回説と
20回説がある。また、派遣回数について
も15回説と16回説があるが、これは唐使
を送った回を含めるかどうかなどで分か
れる。
- 16) 朧谷寿『日本の歴史⑥ 王朝と貴族』
(集英社 1991年) p.203
- 17) 森克己『遣唐使』(至文堂 1955年)
p.210~211

主要参考文献

- ・東野治之『遣唐使船 東アジアのなか』(朝
日新聞社 1999年)
- ・榎本淳一『「国風文化」と中国文化—文化
移入における朝貢と貿易』(池田温編『古
代を考える 唐と日本』吉川弘文館 1992年)
- ・村井康彦「国風文化の創造と普及」(岩波講
座『日本歴史4 古代4』岩波書店 1976年)
- ・石井正敏「10世紀の国際変動と日宋貿易」
(『新版古代の日本 第2巻 アジアからみた
古代日本』角川書店 1992年)